

夏季企画展 百鬼夜行の世界

会期 2020年6月27日～9月13日

会場 金剛館2階展示室

品名	形状	作者	時代
1、百鬼夜行図			
百鬼夜行図帖	紙本着色 帖面	雲山	寛政12年(1800)
鑿子	銅製		
龍頭幡頭 ●	銅製鍍金		鎌倉時代
錫杖頭 ●	銅製		永正7年(1510)
鰐口	銅製		元暦元年(1184)
梅樹双鳥鏡	青銅製		室町時代中期
百鬼夜行図	絹本着色 卷子		明治時代後期
2、ユーモア×異界			
地獄戯画	紙本着色 掛軸		江戸時代後期～明治
鬼四季図巻	紙本着色 卷子	雪堂	明治～大正
戯れ絵巻	紙本着色 卷子		江戸時代後期
異類異形編	紙本着色 卷子	牧野忠精	安永8年(1779)
3、現代作家×異界			
骸骨写楽図	木版画	北野武	平成10年代
妖怪図 3点	木版画	ヤン・シュヴァンクマイエル	平成23年(2011)

品名欄の●は重要美術品

古今を問わず我々の興味を誘ってきたもののけ・妖怪たち。本展ではそんなもののけや妖怪が登場する百鬼夜行図などの絵画やそれに関係する品々を展示しています。本展のメインとなるのは【百鬼夜行図】のセクションで、ここでは江戸時代後期に描かれた《百鬼夜行図帖》やそこに描かれたもののけの原形となった道具などを展示しています。展示はさらに、【ユーモラス×異界】と【現代作家×異界】へと進みますが、前者では、聖人・貴人などの登場人物(もののけ・仙人・仏様なども含まれる)が思いもよらない場面を構成する《戯れ絵巻》や、江戸時代のお殿様が空想の生き物を描き連ねた《異類異形編》を中心に展示し、後者では、お笑いタレント・映画監督などとして活躍している北野武(ビートたけし)やチェコスロバキアの現代作家ヤン・シュバイクマイエルが原画を描いた木版画を展示しています。

時代を問わず存在した、もののけ・妖怪への畏怖や憧れ、そしてそれらを形にするときのユーモアセンスを感じながらご鑑賞いただければ幸いです。

百鬼夜行図とは

鬼や物の怪、魑魅魍魎(ちみもうりょう)が跋扈する絵を総じて、百鬼夜行図(ひゃっきやぎょうず)と言います。夜行図は室町時代から描かれるようになりましたが、そこには、粗末に扱われた道具が物の怪と化すという付喪神(つくもがみ)信仰や、擬人化した動物を描いた鎌倉時代初期の絵巻・鳥獣人物戯画(ちょうじゅうじんぶつぎが)の影響が見られます。

展示中の夜行図にも楽器や日用品などの道具の物の怪、蛸や蛙、猪・猿などの物の怪が描かれ、画面内を所狭しと動き回っています。

また、賑やかさそうに見えるのも夜行図の特徴です。楽器・持物がガチャガチャ鳴る音や叫び声・わめき声などを想像しながら鑑賞すると、一層楽しい絵図になるはずです。

百鬼夜行図帖(部分)



百鬼夜行図に描かれた道具たち

百鬼夜行図帖には色々な種類の道具が描かれていますが、その中から、いくつかのものをピックアップして展示しています。

描かれた道具の中には日用品が多く含まれていますが、仏教にまつわる道具も比較的多いように思われます。

当時の人々にとって、「仏教」は身近な存在だったのかもしれないですね。

では、どんな道具がどんな風に描かれているのか、確かめてみてください。



銅鏡



錫杖頭



鍔子



鰐口



龍頭幡頭

戯れ絵巻

羽根つきするえんこう(猿)からはじまる当絵巻は、「まさかあの人とこの人がこんなことを」という想像を形にした「戯れ」な絵巻です。

「戯れ」の場面は十五あり、登場する人物・動物は名前が書かれているものだけで六十七に達します。

天狗と大黒様の一騎打ちに日蓮と法然の腕相撲、空海・孔子・文殊菩薩らによる花札、隠元の曲芸に中国の文人や牛若丸らの宴会と、場面は進みますが、最も戯れているのは巻末かもしれません。なんせ、蟹が雷様を襲っているのですから。

と、笑いながら見られる当品ですが、絵巻としては裏打ちがなかったり所々に切断のミスがあったりと、簡易的な作りになっています。

登場する文物などから見て、江戸時代以降に描かれたと考えられます。



日蓮と法然の腕相撲



維摩・十王の銭勘定

文殊菩薩・空海・寿老人・孔子・神農による花札



観音様の鉄砲稽古

異類異形編

江戸幕府の老中も務めた越後長岡藩の第九代藩主・牧野忠精(ただきよ)が自ら考えたと思われる異類異形(化け物や妖怪の類)を描いた絵巻。

忠精は冷泉家から和歌の懐紙相伝の免状を得るなど、文化的素養の高い人物でしたが、この絵巻を見ると一風変わった空想の世界で遊ぶというとても親しみやすい人物だったのかもしれませんが。

さて、本品には化け物や妖怪の類が一〇三体描かれており、第七十一までは概ね個体ごとに番号が振られています。ただ、この番号を書き込んだのが忠精なのか、後世の持ち主なのかは不明です。

なお、明治以降は新潟の神官・歌人である日野資徳が旧蔵していたのではないかと思います。

